

港に面したメインストリートの中心部に税関がそびえ立ち、その周囲に商社や銀行の豪壮なヨーロッパ風のビルが建ち並ぶというブエノスアイレスの景観は、これほどの規模ではないにせよ、ちょっと上海を思い出させるものであった。19世紀末～20世紀初めの国際貿易拡大期に、どちらも経済発展の時代を迎えている。やがてブエノスアイレス生まれのタンゴのリズムは1930年代の上海にも伝わり、中国で最も多くの人々に愛唱された流行歌の一つ「君いつ帰る」（「何日君再来」）が作曲された。街角を歩きながら、アルゼンチンも中国も、同じ時代をくぐり抜けてきたという感慨を抱く。

たまたま今年（2002年）7月末、第13回国際経済史学会がブエノスアイレスで開催され、その中の「アジア国際秩序、1930-1950年代」分科会の準備に加わっていたので、はるばる彼の地を訪れることになった。往復4万km、機内食合計10回の空の旅。しかし煌々と月光に照らし出された大河と熱帯雨林、遙かに遠望されたアンデスの山並みなど、機内から垣間見たこんな情景だけでも十分に来たかいると感じた。そして幸い、そのほかにもいろいろなものに出会うことができた。

グレコ、ゴヤなどのスペイン絵画はもちろんのこと、レンブラントやルーベンスといった巨匠たちの作品、それにドガ、モネ、ロダンなどの近代フランス美術にいたるまで、アルゼンチン国立美術館は、ヨーロッパの各時代・各地域にまたがる良質の作品群を抱えている。19世紀末から20世紀初頭にかけて、この国に蓄積された富の一端を物語るものなのであろうか。それに圧倒されながら、ふと気づいてみると、「明代の陶器」とされる作品（真偽のほども心もとない寄贈品）が2点、片隅に展示されていた。そして、それだけであった。アジアの文明の存在が、あまりにも小さい。その時、似たような印象を受けた経験がある、と思い起こしたのは、ほかでもない中国の美術館や博物館の情景であった。中国国内の地域ごと時代ごとに、すばらしい内容の伝統美術品が陳列されているのに対し、中国以外の地域の作品、とくにヨーロッパの芸術作品となると、ほとんど目にするこすうでできない。ヨーロッパ絵画の影響を受けた清代の中国画を見ることはできるし、ヨーロッパ人宣教師が宮廷のために捧げたエッチングなどは存在する。しかし近代ヨーロッパのすぐれた芸術作品それ自体を直接鑑賞する機会は、中国の一般の人々にとって、未だにきわめて稀な経験の中に属している。確かに両地域は同じ時代をくぐり抜けてきたし、ラテンアメリカを論じてきたフランクが中国文明の見直しを説く大著『リオリエント』を執筆するほど、両地域に対する学問的関心を共有できるような状況も生まれつつある。しかし両地域の間に横たわる溝は、依然として広く深いものなのかもしれない。

ブエノスアイレスで受けたもう一つの強烈な印象は、中心街の片隅にひっそりとたたずむ民族博物館の展示であった。日本人にとっては「隣のお兄さん」といった容貌に見えるインディオの人々が誇らしげな狩猟姿で立っている白黒写真。それを眺める我々の耳に、彼らを一掃し広大な牧草地を確保するための軍事作戦がアルゼンチン政府により1870年代以降に展開された、との説明が博物館の運営を手伝う大学院生の口から淡々と語られていく。実は「帝国主義」対「民族主義」の二項対立的な図式で描かれてきた従来のアジア近現代史像を見直そうというのが、国際経済史学会における我々の分科会の一つのテーマであった。それだけに「帝国主義」ではなく「民族主義」がマイノリティーを絶滅させていく凄まじい過程に向き合わされ、様々な思いを抱いたというわけである。

同じ時代の異なる地域の社会経済を、どのように共通の言葉で認識するのか、その課題の複雑さを知る上で今回のブエノスアイレス体験は得難い貴重なものになった。